

2021年1月31日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

歴代誌下 24 : 17～22

ルカによる福音書 11 : 45～54

「その責任は」

<幸いと不幸>

今日の聖書箇所は、37 節で「イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の正体を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた」と語られていた、この場面の続きです。

イエスさまは神に遣わされた神の御子であり、救い主であるお方です。神の力で、悪霊を追い出し、罪の支配を打ち破り、死に勝利して下さる。そのために、わたしたちの世に来て下さったお方です。

そして、今人々の目の前で、神の国、つまり、罪も悪も支配する、神の恵みのご支配の到来を告げておられます。この、イエスさまの御言葉、神の言葉を聞いて、それを信じ、受け入れ、与えられた恵みの中に置かれる人は幸いです。

イエスさまはそのことを、11 章 28 節で「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と言われました。

しかし、それに対して、37 節以降、イエスさまは、ファリサイ派と律法の専門家の人々に「不幸だ」と言われました。そして今回は、ファリサイ派の「不幸」について語られたことを聞いたのです。

イエスさまは、ファリサイ派の人々は、神の言葉を聞いて忠実に守るように見せかけていながら、その根底にある神さまの御心を見失っている。そして、本当に神さまが求めておられること。神さまの救いを感謝し、喜んで受け入れること。そして、神さまと隣人を愛して歩むことが出来ていない、と言われました。

正しく神さまの言葉に従い、信仰深く人々に見られるように振る舞いながら、その内側の心では、神さまのことより、自分のことを重んじている。神さまの眼差しよりも、人の目を気にしている。そのような歩みは不幸だ。心に、自分の思いや欲望を満たすのではなく、神の恵みによってこそ、あなたの内側を満たしなさい。そして、その受けた神の愛、神の恵みが、あなたの行い、生活、日々の歩みに溢れてくるようにしなさい。39～44 節ではそのようなことが語られていたのです。

<律法の専門家>

そして今日は、続いて律法の専門家の人々に語られたことを、聞きたいと思います。

イエスさまがファリサイ派の人々に先ほどのように語られたことを聞いて、律法の専門家の一人がこのように言いました。「先生、そんなことをおっしゃれば、わたしたちをも侮辱

することになります。」

律法の専門家とは、聖書の専門家、つまり、神の言葉の専門家、ということです。神さまが語られた言葉。イスラエルの人々が神の民として生きて行くために、神さまから与えられた律法。それをどう解釈して、日々の生活の中で守っていけば良いか。それを教えるのが律法の専門家でした。

神さまの律法は、エジプトの奴隷の中から救い出されたイスラエルの民が、神さまの民として、与えられた恵みに感謝して、どのように歩んでいけばよいかを導くものでした。ですから、この神の律法は、イスラエルを愛し、救って下さった神さまからの言葉であり、人々も感謝と喜びをもって聞き、心から従うべき御言葉なのです。

しかし、先週の箇所では、ファリサイ派の人々はその神の言葉である律法を、一言一句間違えないように、字面通りに、形式的に守ることに捉われ、その根底にある本当の神さまの御心を見失っている。そして、神さまの御心より、自分たちのことを思っている、と指摘されたのでした。

そして、ファリサイ派が生活において厳密に律法を守ろうとする歩みは、この律法の専門家たちによる律法解釈に基づいていました。それで、律法の専門家もファリサイ派に属する人々が多かったのです。それで、律法の専門家は、「先生、そんなことをおっしゃれば、わたしたちをも侮辱することになります」とイエスさまに言ったのです。

実際に、律法の専門家たちも、律法を解釈して、生活のすべてに当て嵌めて、あれはダメ、これはダメ、そのためにはこうすべき、ああすべきと、少しでも律法を破ることのないように、律法の解釈に基づいてさらに事細かなルールを生活の中に定めていました。

本当は、神の律法は、神さまの救いに感謝して、恵みを喜んで、その神さまが望まれる歩みをするための御言葉でした。しかし、いつしかそれは、破ってはいけないもの、守れなければ恵みから脱落するものとなり、ただただ、人を縛り付けるものようになってしまっていたのです。

それで、イエスさまは律法の専門家たちにも、ファリサイ派の人々と同じように、「不幸だ」という言葉とともに、三つの事を指摘されたのです。

<律法の専門家たちの不幸>

(重荷)

まず、最初に言われたのは 46 節です。「イエスは言われた。『あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ。』」

イエスさまは、律法の専門家が、神の言葉である律法を、感謝と喜びの生活を導くものではなくて、人々の重荷にしてしまっている、と言われました。しかも、人には背負いきれない重荷です。律法を与えて下さった神さまの、民を愛する心、恵みを注いで下さる憐れみの

心が忘れられて、表面の戒めばかりが注目されるようになってしまった。そんな今や、神の言葉は、神の民が喜んで従うものではなくて、神の民ならばこれを守らなければならないもの、守れなければ救いから落ちてしまうもの、となってしまったのです。

そうすると人々は、どれだけ律法を正しく守っても、自分でも気づかずにどこかで破ってしまっているかも知れない、と不安になる。破ってしまったなら、神さまの恵みから遠ざかった者、罪人として扱われる。どれだけ頑張っても、どれだけ努力しても、いつもそのような不安と隣り合わせで、満たされることがないのです。

だからこそ人々は、これは律法違反にならないか、これは律法で許される範囲か、生活の細かい一つ一つについて、律法の専門家に教えてもらわなければなりません。

そうして、神の言葉が、恵みを受けて生きるためのものどころか、不安を掻き立てる重荷になっている。しかも、そのように人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷にふれようとしない。律法の専門家は、神の言葉の専門家でありながら、人々に神の言葉による慰めを与えないで、ただただ神の言葉を重荷に変えて、人々を苦しめているだけだ。イエスさまは、そのように言われたのです。

(預言者殺し)

そして、続けてもっと激しい内容を語られました。47～51 節です。「あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。こうして、あなたたちは先祖の仕業の証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あなたたちは墓を建てているからである。だから、神の知恵もこう言っている。『わたしは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はその中のある者を殺し、ある者を迫害する。』こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。それは、アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血にまで及ぶ。そうだ。言うておくが、今の時代の者たちはその責任を問われる。」

律法の専門家たちは、「自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てている」、そして、先祖の業の証人となり、先祖がしたことに賛成している、と言われていきます。

彼らの先祖、つまり、旧約聖書の時代のイスラエルの人々が、神さまが御心を民に知らせるために遣わされた預言者を殺す、という出来事がありました。その例の一つが、ここに名前が出て来ましたが、今日読まれた旧約聖書の歴代誌下の、ゼカルヤという預言者です。

神の言葉を告げる預言者を殺す、ということは、神の言葉を受け入れないということです。それは、神さまご自身を拒否するのと同じことなのです。

そしてイエスさまの時代になって、律法の専門家たちは、そのように先祖に殺された預言者たちを覚えて、墓を建てている。自分たちは、神の言葉を告げる預言者を重んじている、神の言葉を聞こうとしていると、人々に示しているのです。

しかし実際には、律法の専門家たちも、神の言葉に示されている神の御心を知ろうとせず、神の言葉を歪めて理解している。恵みの神の言葉を、人々の重荷へと変質させてしまっている。それならば、それは神の言葉を拒否しているのと同じだ。先祖が神の言葉を語る預言者を殺したのと同じだ。結局、律法の専門家の建てた墓もまた、預言者を葬るために、預言者を殺すために建てているのだ、ということです。墓を建てた律法の専門家が、先祖の仕業の証人となり、それに賛成している、とはそういうことなのです。

これまでアベルからゼカルヤまで、神に従う人、神の言葉を語るために遣わされた人の血が、神の言葉を拒否する人々、神の御心を受け入れない人々によって、流されて来しました。

そして今また、イエスさまの御言葉を拒否する者たちも、神の言葉を歪め、受け入れない者たちも、先祖と同じように預言者を殺しているのだ、と言われているのです。

だから、今の時代の者たちはその責任を問われる。イエスさまの御言葉を拒否した。神の言葉に聞き従わず、御心を見捨てた。その責任を問われるのです。

これは、イエスさまの厳しい怒りのお言葉です。

(鍵を取り上げる)

そして最後の三つ目は、52節にあるように、律法の専門家たちは、知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきた、と言われています。

わたしたち人間は、自分たちの知識で、神さまのことを知ったり、救いについて理解したりすることは出来ません。神さまのこと、その救いのご計画、恵みについては、神さまご自身によって示されるしか、わたしたちには知る方法がないのです。

そして、それを知らせるものこそが、神の言葉であり、イエスさまなのです。わたしたちは、神の言葉によって、イエスさまによって、神を知り、救いを知り、恵みを知り、それを信じて、受け入れることが出来るのです。神の国、神のご支配に、救いの恵みの中に、入ることが出来るのです。

しかし、律法の専門家たちは、その救いを与える神の言葉を、歪めてしまっている。神の国に、神の救いに入るための鍵を変形させて、入れなくしている。そして、自分たちが入ろうとしないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきている、と言われているのです。

本当は、神さまが遣わして下さったイエスさまのもとへ、人々を招く神の言葉なのに。救いの道を示し、信仰の扉を開く神の言葉なのに。その言葉自体が、神さまの愛と恵みなのに。律法の専門家たちは、その恵みを取り上げてしまっている。それは不幸だ。イエスさまは、そう厳しく非難されたのです。

<その責任を問われたのは？>

このあと、律法が者やファリサイ派の人々は、イエスさまに対して激しい敵意を抱いた、とあります。そうして彼らはイエスさまの命を狙うようになり、やがて計略を巡らし、イエスさまを裁判にかけて、十字架の死へと追いやっていくのです。

まさに、神の言葉を受け入れない、神さまを拒否するその思いが、神さまが遣わして下さった、最後で、最高の預言者である神の御子イエスさまを、殺すことになったのです。語られた神の言葉を拒否するとは、まさにそういうことなのです。

そしてこれは、ファリサイ派や、律法の専門家だけの話ではありません。わたしたちも、わたしたちを救うために、恵みへ招くために語りかけて下さった神の言葉を拒否したり、自分に都合よく歪めたりするなら。神さまが遣わして下さったイエスさまを受け入れないなら。彼らと同じことをしているのです。

「今の時代の者たちはその責任を問われる。」神の言葉に背いた責任。神の言葉を受け入れなかった責任。神さまを拒否し、預言者を殺したその責任が問われるだろうと、イエスさまは言われました。

神さまに背いた罪は、消えたり、無かったことにはなりません。わたしたちが犯した神さまに対する罪は、自分で負いきれないほどに積み重なっています。律法の専門家も、そしてわたしたちも、誰もその罪の重さに、責任の重さに、耐えることは出来ません。

律法の専門家は、神の言葉を拒否した責任を問われたのでしょうか。わたしたちは、神の言葉に背いた責任を問われるのでしょうか。世の誰も、この責任を自分で引き受けることは出来ないし、耐えることが出来ないのではないのでしょうか。

しかしただお一人。救い主として神に遣わされたイエスさまだけが、この重荷を引き受けて下さることが出来るお方なのです。

イエスさまは、律法の専門家の罪も、またこのわたしたちの罪も、ご自分の身にすべて負って下さいました。すべての人のために御自分の命を差し出して下さり、すべての人が自分で負うべき、しかし負いきれない責任を、代わりにお一人ですべて担って下さいました。そうして、御自分の命をささげ、わたしたちの罪を贖い、赦しを与えて下さったのです。

<神の言葉を聞き、守る>

天の父なる神さまは、それを良しとして下さいました。父なる神さまは、わたしたちがどれだけ背いても、どれだけ罪を犯しても、心から愛して下さいていること。わたしたちが神さまと共に生きることを望んで下さっていること。そのために、わたしたちの罪を赦して下さいということ。そのことを、御子イエスさまの十字架と復活によって、語って下さったのです。救いの御業を成し遂げて下さったイエスさまご自身が、この神の言葉です。愛の言葉です。赦しの言葉です。

この神の言葉を聞いたなら、もうわたしたちは、これを拒否したり、歪めたり、捨て去ったりしてはなりません。わたしたちは、ここから離れてはいけません。「幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人」なのです。

神の言葉は、決してわたしたちの重荷になったり、生活を縛ったり、追い詰めたりするも

のではありません。わたしたちは時に、神の言葉、聖書の言葉を、受け入れ難く感じたり、自分勝手に歪めて解釈し、自分を裁く神の怒りの言葉として聞いたり、また、隣人を裁くための言葉として用いようとしてしまうことさえあります。

しかし、神の言葉を聞く時は、いつもそこに、わたしたち全ての罪のために十字架に架かって死なれ、復活なされたイエスさまがおられることを、忘れてはいけません。御自分の命を与えるほどに、わたしたちを愛して下さい。わたしたちの罪を赦して下さい。わたしたちが神さまを信じて生きることを望んで下さる。苦しみの中でも、悲しみの中でも、罪の只中でも、いつも一番近くに共にいて下さる。このイエスさまのお姿を、御言葉においてしっかりと見つめなければならないのです。

確かに、神の言葉はわたしたちの罪を明らかにします。しかしそれと同時に、神の言葉はわたしたちを救いの恵みへと招いているのです。わたしたちがつまずいたり、弱さによって倒れたり、自分の罪に絶望したりする時も、神の言葉は、わたしたちを断罪しようとしているのではありません。神の言葉は、イエスさまの十字架は、そんなあなたを神さまは愛し、憐れみ、赦し、救って下さるのだと語っているのです。それを歪めてはなりません。その御心を見失ってはなりません。この恵みを拒否してはいけません。この神の言葉を、わたしたちは素直に、ただ受け入れ、神さまの御許に行けばよいのです。

神さまは、わたしたちが「父よ」と祈り求めることを、待っておられます。いつでも、聖霊を与えて、わたしたちを神の子として受け入れようと、待っておられます。

幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人である。その幸いに生きることを、その幸いに留まることを、祈り求めましょう。

【お祈り】

父よ。全能の神、天地の造り主である神を、わたしの父よと呼び、祈ることが出来る幸いを感謝いたします。

あなたは、わたしたちを救うために、イエスさまを遣わして下さい、神の言葉を与えて下さり、神さまのご支配へと招いて下さいました。しかし、その恵みを素直に受け取ることが出来ず、御言葉に背いたり、歪めたり、また神さまの御心を思わず、自分勝手に解釈をして、ますますあなたの恵みから離れようとするわたしたちの罪を、どうかお赦し下さい。

しかし、その罪をすべて御子イエスさまが担って下さった、その十字架と復活の恵みの中で、わたしたちは今日の御言葉を聞きました。どうか、わたしたちが澄んだ目を持ち、器の内側をあなたの恵みを受け取るために空っぽにし、注がれる恵みを、神の言葉を、豊かに、素直に、受け取ることが出来ますように。

そのようにわたしたちを導き、新しくし、救いに与らせて下さる聖霊を与えて下さい。

そして、イエスさまの救いによって神の子とされ、恵みの中で、神さまと共に生きる、最も幸いな歩みを、わたしたちに与えて下さい。

求めなさい。そうすれば与えられる、との御言葉を信じます。

このお祈りを、イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン